

カギュー派の源流

——マルパからミラレーパへ——

渡 邊 温 子

1. はじめに

チベットの翻訳師、マルパ=チューキ・ロドゥー (Mar pa Chos kyi blo gros, 1002–1097) はインドとネパールを訪れ、ナーローパ (Nāropa, 1012/1016–1039)¹⁾ を初めてする行者たちのもとで密教を学び、その教えをチベットへともたらした。マルパには有名な四大弟子がいるが、その中でも尊者ミラレーパ (Mi la ras pa bZad pa'i rdo rje, 1040–1123) は現在でも宗派の枠組みを越えて広くチベットで信仰を集めている。彼は修習を修行の中心とし、主に西チベットとネパールを遊行して、多くの所化を教化した。その後、ミラレーパの弟子であるガムポパ・ソナム・リンチェン (sGam po pa bSod nams rin chen, 1079–1153) がカダムの教えとマハームドラーの教えを融合させ、カギュー派の教団を形成した。

本稿ではカギュー派の祖師であるマルパがどのような教えをインドから授かり、弟子のミラレーパへと伝えたのかを確認し、カギュー派の源流について考察したい。

2. マルパの求法

マルパはインドを三度訪れ、多くの行者たちに師事して密教を学んだが、その中でも中心的な師はナーローパとマイトリーパ (Maitripāda, 1002–1077) である。まず彼らから主にどのような教えを授かったのかを確認したい。

ナーローパ

母タントラ：ヘーヴァジュラ、チャクラサンヴァラ、マハーマーヤー、金剛四座、ブッダカパーラなどの瑜伽行 父タントラ：グフヤサマージャなど

その他：四伝タントラの教誡、和合往生の口訣、五次第の口伝、ヘーヴァジュラ・グフヤサマージャ・金剛四座のタントラ、ツァ・ルンの綱目などの教誡の四巻、究竟次第、マハームドラー、ポワ・トンジュクなど

マイトリーパー

ヘーヴァジュラ、マンジュシュリー・マサンギーティータントラと注釈、ドーハ、マハームドラーの教誡など

特にマハームドラーに関しては、マイトリーパーの指導のもとでマルパは証悟を得たとされる。その他、シワ・サンポ（Zhi ba bzang po）、イシ・ニンポ（Ye shes snying po）などインドとネパールの多くの師に師事した。

3. 大蔵経に収録されている翻訳作品

北京版大蔵経にナーローパの著作もしくは翻訳した作品が17点、マイトリーパーの作品が8点収められているが、そのうち少なくともナーローパに関して9点がマルパによる翻訳である。

(1) *bhagavacchrīcājrasaṃvarasādhana-nāma* (P.No.4614) (2) *śrīguhyaratnacintāmaṇi-nāma* (P.No.4623) (3) *śrīcakrasaṃbaravikurvaṇa, caturviṃśatideśapramāṇaśāsaṇa* (P.No.4628) (4) *śaḍdharmopadeśa-nāma* (P.No.4630)²⁾ (5) *karṇatantravajragāthā-nāma* (P.No.4632) (6) *vajrayoginīsādhana* (P.No.4673) (7) *śrīguhyasamājopadeśapañcakramanāma* (P.No.4789) (8) *pañcakramasaṃgrahaprabhāva* (P.No.4790) (9) *śrīmatīdevīmahākālīguhyasādhana-nāma* (P.No.4929)

マルパはナーローの六法、ヘーヴァジュラやチャクラサンヴァラ、五次第に関するものに加え、瑜伽行女の成就法などを翻訳しているが、(1)は bhayakīrti, (4)は ティーローパ、(5)は作者不明による作品をマルパとナーローパが共同で翻訳した。また、(2)(7)(8)はナーローパが作者であると同時に、マルパと共訳したと奥書に書かれている。マイトリーパーに関しては、マハームドラーについての著作である *mahāmudrākanakamālā-nāma* (P.No.2454) のみをマイトリーパーと共同翻訳していることから、マルパにとってマイトリーパーの教えの中でもマハームドラーの教えが中心だったことがわかる。

マルパはこれ以外にも、自身の師であり兄弟子にあたるイシ・ニンポのマハーヨーガについての教えである *śrī-sarvatathāgataguhyatantrayogamahārāja-advayasamatā-vijaya-nāma-vajrasrīparamamahākālpa-ādi* (P.No.0088) やドンビヘルカ (Dombiheruka) の著作を jānākara と共訳するなど、6 作品を翻訳している³⁾。

4. マルパの著作

翻訳以外にもマルパは多くの著作を残している。'bri gung bka' brgyud chos

(72)

カギュー派の源流（渡 邊）

mdzod chen mo, の *ca, cha* の巻にマルパの著作が見られる他、近年北京からマルパ全集が出版された⁴⁾。ティーローパ、ナーローパ、マイトリーパの伝記に加え、マハムドラーや、ナーローの六法、瑜伽行女の修習法、宗教歌などについて多くの著作が残されている⁵⁾。

5. 諸伝記における教えの記述

マルパは、インドとネパールで授かった教えをチベットの人々に伝えた。特にメートン (*Mes ston*)、ゴクトン (*rNgog ston*)、ツルトン (*mTsur ston*) そしてミラレーパの4人がマルパの中心的な四大弟子である。その中でも、ミラレーパは、

私は尊者ナーローパの諸々の教誡の中から他の弟子たちにはない優れた教えである、ダーキニーの口伝の教誡をお前に特に授けたので、満たされた瓶の如くである。私の言葉に嘘と、教戒に過不足があろうか。ありはしない。(*rNal 'byor gyi dbang phyug chen po Mi la ras pa'i rnam mgur*. p.120)

とマルパが述べるように、ダーキニーの教誡を含めた教えを余すところなく授かったとされる⁶⁾。しかし、具体的にどのような教えをマルパが授けたのかについて諸マルパ伝⁷⁾の中に詳しい記述は見られない。ゴクトンによって書かれた *Bla ma mar pa loa tsā ba'i rnam par thar pa lags par gda'o* にはミラレーパの名前は出てこない。ゴクトンはミラレーパの兄弟子に当たるため、師の伝記を編纂する際に弟弟子について記述しなかったのは自然のこととも取れるが、後代書かれたマルパ伝でも、ミラレーパに関する記述は殆ど見られない。15世紀にミラレーパ伝と十万歌を編纂したツァンニョン・ヘールカ (*gTsang smyon he ru ka*, 1452-1507) の著したマルパ伝には、ミラレーパの記述が他の伝記と比べて多くみられる⁸⁾。しかし、ここでもミラレーパが具体的にどのような教えを授かったかについては言及されていない。

一方、諸々のミラレーパ伝⁹⁾に見られるマルパからの伝授の記述は、その殆どが類似しており、マルパが自身の教えを余すことなくミラレーパに伝え、教えに封印をしたということ、マルパがナーローパから完全に授かることの出来なかった「無身ダーキニーの教え」の残りをインドから授かってくるように指示する記述のみが見られる¹⁰⁾。

6. まとめ

本稿ではマルパがどのような教えをナーローパとマイトリーパを中心とした諸師たちから授かりチベットに伝えたのについて確認した。ミラレーパ自身は書物

を書き残していないため、彼の仏教理解がどのようなものであったのかは現存する宗教歌から推測するしかない。しかし、マルパがどのような教えを授かっていたのかを考察することによって、マルパからミラレーパにどのような教えが伝えられたかについてその内容を推測することはある程度可能である。その具体的な教えの内容については別稿にて論じたい。

-
- 1) ナーローパの没年に関して、高野山大学の静春樹先生よりご助言をいただいた。アティシャ伝に見られる記述から、ナーローパの没年はアティシャが入藏した直前と見られる (Alaka Chattopadhyaya, *Atiśa and Tibet*, Motilal Banarsidass, 1967 参照)。2) ティローパの作とされながら、後代の弟子たちによってあまり重要視されていない (Ulrich Timme Kragh, "Prolegomenon to the Six Doctrines of Nā Ro Pa: Authority and Tradition," In *Mahāmudrā and the Bka'-Brgyud Tradition*, IITBS, 2011, pp.131-177)。3) 大蔵経の中にマルパの名の付く翻訳師はマルパ・チューキロドゥとマルパ・チューキワンチュク (Mar pa Chos kyi dbang phyug) が見られる。単にマルパの名が付けられているものは内容と共訳からどちらの翻訳か判断した。二人のマルパはネパールで出会ったとされる (川越英真「Mar pa Chos kyi dbang phyug と彼の Lo chuñ について」『印度学仏教学研究』33-2, 1985, pp.741-737)。4) *lHo brag mar pa lo tsā'i gsung 'bum*, 7 vols. Krun go'i bod rig dpe skrun khang, 2011。5) マルパの著作とされながらも *lHo brag pa'i khyad par gyi gdams pa snyan gyi shog dril gzhung lhan thabs dang bcas pa* のように作者不明の作品や *dPal rdo rje mkha' 'gro lus med pa'i chos* のようにマルパの作品が後に書き加えられたと考える作品もある (註4, vol.1, 2011, pp.6-7, 拙稿「レーチュンパからミラレーパに伝わる「無身ダーキニー」の教えについて」『印度学仏教学研究』60-2, 2012 参照)。6) マルパが教えの全てをミラレーパに教えていたとすると、ミラレーパが後に、バリ翻訳師から金剛菩薩の成就法を授かっていることから、マルパの密教は完全なものではなかったと推測される (*Nyi zla'i 'od zer sgron me*, In *rJe btsun mi la ras pa'i gsung 'bum*, Vol.5, p.258)。7) 註4, vol.1。8) マルパが三度目にインドへ求法に出かけた理由が、マルパ、ダクメーマ、ミラレーパに授記があり、ミラレーパがマルパにトンジュクの教えを教えたいと請うたことに帰せられているが、このような記述はツァンニョン以前の他のマルパ伝には見られない。9) ミラレーパの伝記の確認に際しては、*rJe btsun mi la ras pa'i gsung 'bum*, 7 vols. Krun go'o bod rig pa dpe skrun khang, 2011. とツァンニョン・ヘールカによって編纂された *rNal 'byol gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyen pa'i lam ston* を用いた。10) 無身ダーキニーの教えについては拙稿 2012 参照。

(本稿は、松下幸之助記念財団「松下幸之助国際スカラシップ」の研究助成「チベットにおける仏教文学の研究と保存—11世紀の聖者ミラレーパを中心に—」(2012年3月—)による成果の一部である。)

〈キーワード〉 マルパ、ミラレーパ、カギュー派

(大谷大学大学院)